

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：32663

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652195

研究課題名(和文)大地震と洪水被害へのパキスタン民間団体の対応

研究課題名(英文)Pakistani NGOs with special reference to disaster relief operation

研究代表者

子島 進 (NEJIMA, Susumu)

東洋大学・国際地域学部・教授

研究者番号：90335208

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円、(間接経費) 360,000円

研究成果の概要(和文)：近年、パキスタンでは、カシミール大地震(2005年)や大規模な洪水(2010年)が相次ぎ、大きな被害をもたらされた。これらの災害時に、パキスタンの多くのNGOが、国外の諸機関とも連携し、さまざまな支援活動を実施した。

本研究では、パキスタン社会において、その存在意義を増しているNGOの平常時における活動、ならびに大規模災害の発生に際しての緊急支援活動について調査を行った。異文化理解という視点から、NGO活動の宗教的基盤(イスラームの価値観)についても聞き取りを行い、明らかにした。

研究成果の概要(英文)： This research project deals with Pakistani NGOs with special reference to disaster relief operation. Islamic concepts directly influencing social services such as thwab (reward) and generosity to neighbors are discussed in details as an essential part of the research.

研究分野：文化人類学・民俗学

科研費の分科・細目：文化人類学

キーワード：パキスタン NGO

### 1. 研究開始当初の背景

近年、パキスタンでは、カシミール大地震(2005年)や大規模な洪水(2010年)が相次ぎ、大きな被害がもたらされた。これらの災害時に、パキスタンでは既存のNGOが活躍するとともに、多くの新しいNGOも誕生し、さまざまな支援活動を実施した。これによって、パキスタン社会において、NGOはその存在意義を著しく高めることとなった。

1990年代から、パキスタンのNGOはその存在意義を高めつつあったが、2000年代に入って生まれたNGOの潮流について、調査の必要性を認識し、研究を開始した。

### 2. 研究の目的

パキスタンにおけるNGOの平常時における活動、ならびに大規模災害の発生に際しての緊急支援活動について調査することが本研究の目的であった。

文化人類学の大きなテーマである「異文化理解」という視点からは、NGO活動の宗教的基盤(イスラームの価値観)についても聞き取りを行い、明らかにすることも重要な眼目となっていた。この点は、今後、日本における大規模災害の発生時にムスリムと協働する場合にも、重要な視点を提供することになると思われる。

### 3. 研究の方法

パキスタンのNGOやそのプロジェクト地を訪問し、インタビューを重ねることで、活動実態と彼らの価値観の把握に努めた。近年の治安悪化を踏まえて、残念ながら、訪問地を慎重に検討する必要があった。日本に暮らすパキスタン人が中心となっているJIT(ジャパン・イスラミック・トラスト)の紹介のもと、訪問地の選定を進めた。このため、それほど多くの団体やプロジェクト地を訪問することができたわけではないが、それぞれの訪問先では十分に時間をかけてインタビューをすることができた。

### 4. 研究成果

調査期間中に訪れたNGOは、以下のとおりである。

・アルカイル・アカデミー(カラチー): 日本の国際協力NGOであるJFSAと緊密な協力関係のもと、カラチーのスラムで学校を運営する。本研究においては、この2つの組織が共同で行った洪水被災地の支援活動に同行し、参与観察を実施した(訪問したのは、2010年大洪水の被災地であるスインド州ダードゥーである)。

・ザキール・ラティーフ・トラスト(イスラマバード): JITが、パキスタンにおけるアフガン難民支援のために設立した団体である。JITからの資金を受けて、次のヒンマツトなどと協力する形で、アフガン難民へ日

本から送られた古着の配布や教育支援をつづけている。

・ヒンマツト(ラーホール): ウルドゥー語で「勇気」という名前をもつ。工具製作の町工場を経営する兄弟が立ち上げたNGOである。ラーホールのシャードバグ地区に設立された眼科の無料診療所の発展形態として、2000年に設立された。この地区には中小の工場が立地し、労働者が多く暮らしている。目の病気に悩まされる人が多いことから、ムハンマド・シャフィーク氏が1979年に設眼科の無料診療所を設立・運営している。同氏の3人の息子が、教育や緊急救援に活動を広げる形で、ヒンマツトを設立した。

・ファラーヒードライン財団(ラーホール): 創設者は、JIT事務局長の父親である。35年間働いたガバメント・カレッジを定年退官後、「私はこの国に多くを負っている」と、貧しい子供たちの学校を始めた。2000年、ファラーヒードライン財団を創設し(財団の名前は、現世と来世における幸福という意味)、13人の生徒を集めて学校を始めた。

2009年に、この財団が運営する学校はより広い場所に移転し、現在では300名(男女およそ半々)の生徒が学んでいる。期間3か月の職業訓練コースも並置されており、20~30名の女性が編み物などを習っている。

・ガザリー教育財団(GET)(ラーホール): 1995年、パンジャブ大学の教員数名が中心となって設立した団体である。団体名は、イスラームの大神学者ガザリーに由来する。パキスタンの地方において教育を普及させることを使命としている。現在、パンジャブ州36県のうち35県において、354校を運営する。2200人の教員が4400人の生徒を教育指導しているが、孤児や経済的に貧しい家庭の子供が約半数を占めている。

活動の一環として注目したのが、生徒たちに渡している「ラマダーン月の箱」である。これは厚紙でできたラマダーン月用の貯金箱である。趣旨は、生徒たちが「より厳しい立場の子供たちのため」に、寄付を集めるといったものである。生徒たちはラマダーン月の初めに貯金箱を受け取る。そして一か月間、自分の小遣いを出したり、家族にお金をもらったりして貯金し、断食が明けたら学校に持参する。必ずしも経済的に豊かではない家庭出身の生徒たちであるが、小さなうちから自分たちにも人助けができることを学ぶツールとして活用されている。

・カーウィシュ福祉財団(ラーホール): 2003年設立のNGOである。カーウィシュは、ウルドゥー語で「探求」を意味する。代表者はエンジニアであり、会社経営のかたわら、教育・社会開発の分野に乗り出した。初等中等教育の普及を中心に、保健、マイクロファイ

ナンス、職業訓練、災害救援、コミュニティ開発などの分野で活動する。

この団体の活動の特徴は「ワンルーム学校」によく表れている（正式な名称は iqra school である）。JITもこれを支援しているが、主としてモスクの空き部屋を利用し、貧困家庭の子供たちに教育の機会を提供するものである。モスクでの教育と言うと、朝から晩まで宗教のことばかり、特にクルアーンを暗記しているのではないかと想像するかもしれないが、そうではない。たしかに生徒たちはクルアーン朗読を勉強するし、イスラーム教育も重視されている。しかし、基本はパンジャブ州（Punjab Text Book Board）の授業シラバスに従い、通常5年かかる課程を3年間で終了するというものである。

#### ・アル・ヒドマツト（ラーホール）

ヒドマツトとは、「奉仕」を意味する。イスラームという言葉の意味は「神への帰依」であるから、このときの奉仕とは、第一義的には神への奉仕となる。そして、その具体的な表現が貧困層や被災者への支援という形をとることになる。

アル・ヒドマツトの活動領域は、災害救援、コミュニティへの奉仕、健康、教育、囚人の福祉向上、孤児のケア、清潔な水と幅が広い。パキスタンの分離独立時の混乱以来、活動をしてきたとするが、歴史はそれほど判然とはしない。この団体自体は政治的活動をするわけではないが、パキスタン有数のイスラーム政治団体であるジャマアアテ・イスラミーから派生してきた NGO である。

アル・ヒドマツトが名実ともに全国的な組織として活発に活動し始めたのは、カシュミール地震を契機とするようである。この地震では、各地で国内外の NGO が支援活動に乗り出した。そして、緊急支援で存在感を示したことから、NGO という言葉がパキスタン社会に一挙に広がる契機ともなった。

上記のうち、いくつかの団体の災害支援に関わる活動内容を報告することとしたい。

#### 1) ヒンマツト

カシュミール地震に際して、この NGO は、ラーホールの事務所を救援本部とし、コーディネーション、寄付、薬品、輸送、ボランティア、緊急救援などの担当委員会を作った。寄付金で物資を購入し、ボランティアを募り、輸送手段を整えて、小麦粉、米、パン、薬、衣料、マット、毛布、掛布団、テントなどのさまざまな物資を被災地に届けた。教育や医療分野での日頃の地域での貢献が認められていることもあり、多くの寄付が寄せられた。

彼らが被災地に送り出した物資の総計は、1500トン、トラック125台分に達した。北西辺境州のマーンセラーに現地本部を置き、さらに被害の大きかったムザッファラーバードやアライなど数か所にフィールドキャンプを設置した。1万5000家族に一月分の

食料を支給し、7万7000人の患者/負傷者に食事を提供した。さらに、心のケアの提供なども行った。その後、ヒンマツトが大工道具や建築資材を提供する一方、被災者が自分の土地に、自力で新しい家を建てていくプログラムを行っている。「自分の勇気で自分の家を」プログラムでは、被災者が自らも参加して住居を作ることで、オーナーシップを取りもどしていくのであるが、最終的には700家族が住居を得ることとなった。これは、工具製作の町工場を経営する兄弟が立ち上げた NGO にふさわしいプログラムであった。

#### 2) アル・ヒドマツト

カシュミール地震は、彼らが名実ともに全国的な組織として活発に活動し始める契機となったようである。カシュミールは丘陵地帯であり、点在する村々へのアクセスは、震災後きわめて難しい状況にあった。被災地となった村の住民によれば、彼らはまだ道路が開通しない被災直後に、救援物資を背負い、歩いてやってきたと言う。被災地域があまりにも広がったこともあり、これらの村々でのアル・ヒドマツトの支援は必ずしも継続的ではなかったようである。しかし、崩れかけた山道を、重い荷物を背負って歩きつづけるのは並大抵のことではない。同胞支援にかける彼らの熱情がうかがえる。

その後も、アル・ヒドマツトは、スワート地方における国内難民の発生（2009年）に際して活動を展開した。当時、ターリバーン支持勢力と政府軍の間で戦闘が拡大し、大量の国内難民が発生したのだった。続いて起きた大洪水（2010年）においても、アル・ヒドマツトはその存在感を発揮した。モンスーンがもたらした豪雨により、パキスタン全土の5分の1が浸水し、2000万人が被災したと言われている。このとき、2万人を超えるボランティアを動員し、1000の救援キャンプと700の医療キャンプを設置した。

2011年3月に発生した、東日本大震災の直後から、福島県で積極的に支援活動を展開したJIT（ジャパン・イスラミック・トラスト）の活動についても調査を行った。この団体は、東京の大塚モスクに本部を置くが、活動の中心メンバーをパキスタン人が担っている。

#### 3) JIT

JIT は震災の直後から東北の各地で物資を届ける活動を開始した。そして、3月末からは、物資の欠乏状態にあった福島県いわき市に活動の焦点をあて、長期の支援活動に取り組んだ。パキスタン人ムスリムが核となりつつも、実際の支援活動は、大塚周辺の住民をはじめとして、信者ではない多くの日本人を巻き込んで行われた。そして、継続的に通うなかで、いわき市の人々との関係も作られていった。国内のみならず、海外のムスリムからの個人ならびに団体からの寄付が、活動継

続のために重要な役割を果たした。

調査を通して、若い世代による新しい NGO が、さまざまな分野で活動に乗り出していることを知ることができた。ビジネス感覚にも長け彼らは、教育や医療といった分野で、新しいアイデアを実践に移しつつある。

また、イスラーム的な価値観との関連において、興味深い意見を聞くことができた。もちろん、すべての NGO に当てはまるわけでないが、イスラームは社会の基底にある価値観として、社会参加を促す NGO にとってもきわめて重要である。そのことを再確認することができた。

「サワープ(報奨)」「隣人への親切」、そして「人類への奉仕」などが活動のキーワードとして浮かびあがってきた。若い世代による新たな NGO の創設と新しいアイデアの実践、そして NGO 活動におけるこれらのイスラーム的な価値観の意義を明らかにしたことが、今回の研究の大きな成果と言えるだろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

子島進、ダニシマズ・イディリス、ムスリム NGO の理念と活動 パキスタンとトルコの事例から、アジア文化研究所研究年報、47、2012、pp.116-124、査読無

〔図書〕(計1件)

子島進、山川出版、ムスリム NGO - 信仰と社会奉仕活動、2014、116

〔その他〕

ホームページ等

<http://www2.toyo.ac.jp/~nejima/>

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

子島 進 (NEJIMA, Susumu)

東洋大学・国際地域学部・教授

研究者番号：90335208